



# 恋だより

鯉の宮坂・宮香本舗

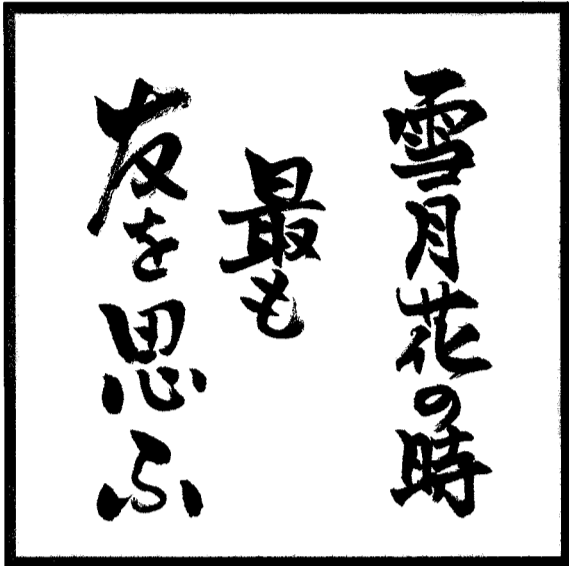
フリーダイヤル 0120-25-7188

fax 0238-21-2309

URL <http://www.koi-miyasaka.com>

■ 第41号 平成24年2月発行

■ 発行 鯉の宮坂・宮香本舗



川端康成がノーベル文学賞受賞記念講演「美しい日本の私」で引用された白楽天の詩の一行である。「日本文化のアイデンティティ(不変性、独自性を保ち続けること)」は季節感であり、四季折々の美に巡り会い最高の感動を得た瞬間には、大切な人のことが切に思われ、この眷びを共にしたいと願うのが日本人の美德でもある。

被災地住民が苛酷で困難な環境におかれながらも混乱に陥ることなく相互に助け合う姿は、世界的な驚異と絶賛を浴びた。これらのことも伝統的な日本人の美德の成せる業であり、これからの再生復興についての礎になるものではないだろうか。

## ごあいさつ

皆様少し遅いご挨拶になりましたが明けましておめでとうございます。また昨年は、格別のお引き立てを賜りまして、誠に厚く御礼申し上げます。去年は東日本大震災という未曾有の災害が起こってしまい多くの犠牲者を出しました。犠牲になられた方々、被災された皆様には重ねて心よりお見舞い申し上げます。

さてこのような大災害に見舞われた最悪の年でしたが、心を動かされた出来事も数多くありました。一つはブータンの若き国王夫妻の来日です。事実上の新婚旅行ですが、最大の目的は震災のお見舞いです。日本の宮内庁だったら被爆の恐れもある地域に、若き皇太子夫妻をお見舞いに送るということなど考えられないでしょう。そのワンチュク国王が被災地の相馬市の小学校を訪れての励ましの言葉とは……

「みなさんは、龍を見たことがありますか？」王の問いに子供たちが戸惑っていると、「私は龍を見たことがあります」その一言で子供たちの中からどよめきが上がった。龍は一人ひとりの心のなかにいます。私たちは「人格」という名の龍を持っています。龍は私たちみんなの心の中に居て、「経験」を食べて成長します。だから、私たちは日増しに強くなるのです。そして、感情をコントロールして生きていく事が大切です。どうか自分の龍

を大きく素晴らしく育てていって欲しい、というのが子供たちへのメッセージでした。なんとも心温まる励ましの言葉ではないでしょうか。

そのワンチュク国王が衆院本会議場で演説をされました。内容の一部です。「(前文略)3月の壊滅的な地震と津波のあと、ブータンの至るところで大勢のブータン人が寺院や僧院を訪れ、日本国民になぐさめと支えを与えようと、供養のための灯明を捧げつつ、ささやかながらも心のこもった勤めを行うのを目にし、私は深く心を動かされました。私自身は押し寄せる津波のニュースをなすすばもなく見つめていたことをおぼえております。そのときからずっと、私は愛する人々を失った家族の痛みと苦しみ、生活基盤を失った人々、人生が完全に変わってしまった若者たち、そして大災害から復興しなければならぬ日本国民に対する私の深い同情を直接お伝えできる日を待ち望んでまいりました。いかなる国の国民も決してこのような苦難を経験すべきではありません。しかし仮にこのような不幸からより強く、より大きく立ち上がる国があるとすれば、それは日本と日本国民であります。私はそう確信しています。(以下略)」



ブータンの国旗とワンチュク国王夫妻



「最後にリンカ語、国の言葉でお話したいと思えます。(リンカ語での祈りが捧げられる)ご列席の皆様。いま私は祈りを捧げました。小さな祈りですけど、日本そして日本国民が常に平和と安定、調和を経験しそしてこれからも繁栄を享受されますようにという祈りです。ありがとうございました。」

何度聞いても読んで私もこの心暖まる言葉の数々に、感動で目頭が熱くなってきました。このスピーチは単に外交辞令としてのお世辞を羅列した作文ではなく、国王の日本に対する愛情に裏打ちされたものだったと思います。だからこそ、人の心、日本人の心を揺さぶるのだと思います。どちらかという顔の皮膚が厚い国会の先生方ですが、国王のスピーチが終了すると、衆議院本会議場は出席議員らが全員スタンディング・オベーションで応え、中には感動して涙した先生方も大勢いたようです。久しぶりに本物の人格者に出会った喜びを感じた瞬間でした。

もう一つは大きな被害を被った気仙沼の中学校の卒業式で、梶原裕太くんが読み上げた答辞でした。「(前文略)階上中学校といえは「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私たちでした。しかし、自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というにはむごすぎるものでした。つらくて、悔しくてたまりません。時計の針は14時46分を指し

たまです。でも時は確実に流れています。生かされた者として顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。命の重さを知るには大きすぎる代償でした。しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。」

被災地の中学生が、これほどまでに苦しい胸の内を涙をこらえながら必死で、それでも助け合って生きていくと、力強く誓った言葉です。「天を恨まず」という言葉には、「恨みからは何も生まれない、どんなに辛くても、後ろを振り返らず、前を向いて進まなければならない」、そのような意味が込められているのかもしれない。この答辞はインターネットのYoutube(ユチューブ)にアップされ何度も観られますが、何度観ても滂沱落涙、涙が溢れてきてしまいます。

ブータンの若き国王も、この少年の答辞には感動したといえます。逆境から立ち上がる少年とそれを支える人格者……。50才を越えた現在を省みれば、この若者たちに遙かに及ばない自分があり、恥ずかしい限りですが、これからでも遅くない、己の中の龍を成長させなければならないというのが年頭の所感です。

長期に亘る景気の低迷や、国民不在の国政、国が滅びようとするかもしれないのにそれでもなお自分たちの権益にしがみつくと一部の人々などを目の当たりにするとつくづく厭になるこの頃ですが、しかしこの若者2人を始め、この後にご紹介するボランティア山形の方々などの活躍を目にすると、世の中まだまだ捨てたものじゃないと思えます。

私たちの先人は、第二次世界大戦や広島、長崎の被爆から立ち上がりました。また関東大震災や先の阪神・淡路大震災など、いずれも絶望の底から再生、復興を果たしてきました。私たちもこの度の災害から立ち上がれると確信しております。今年が復興元年、素晴らしい年になることを願っております。

代表取締役 宮坂 宏



慰問先の相馬市の小学生に囲まれて

ちょっと古いけどプロジェクトXならぬ  
プロジェクトB ～挑戦者たち～

人類の歴史と文明を変えたのは「プロジェクト」である



はじめちゃん 丸ちゃん やっちゃん マコちゃん

\* 4人の共通点: 厄介ごとでも頼まれるとや  
といえない。

**はじめちゃん** ボランティア山形  
代表理事 井上 肇  
市議会議員を目指していたが、生活クラブや  
まがた生活協同組合理事長となり、現在は特別顧問。グループホーム「結いのき」専  
務理事。その他多数の会社・団体の役員  
を兼務。損得では動かさず、政財界は元  
より多岐に渡っての人脉を持っている。他の  
3人とは違い下戸。

**丸ちゃん** 同副代表 丸山 弘志  
京セラのエリートサラリーマンだったが、阪  
神淡路大震災で被災後、価値、人生観が  
大きく変わり、ボランティアの道へ傾倒。元参  
議院議員中村敦夫氏の公設第一秘書を  
経て、たもぎ草普及協会代表、(株)日本復  
興支援機構社長、女房子供を残し単身米  
沢でボランティア活動を継続している。お酒  
が大好きで、酒飲みを断ったことが一度も  
ない。松田聖子が好き。

**やっちゃん** 同事務局長 新聞 寧  
ニイゼキ寝具店の社長、米沢市日中友好  
協会事務局次長。肉も魚も奥さんも苦手。酒  
と豆腐とタバコで生きている。オールバックにする  
と横山やすしとそっくり。性格も似ている  
かも? マコちゃんを虐めるのが好き。

**マコちゃん** 同理事 綾部 誠  
三菱自動車工業を経て山形大学大学院  
理学研究科准教授。専門分野は技術移  
転論、組織マネジメント、国際福祉等々。趣  
味は海外旅行、釣り(陸釣りはX)、スペイン  
語が得意。お酒が好きで、はじめちゃんに  
お酒で釣られてボランティアの道に足を踏み  
入れたらしい。酔っぱらったやっちゃんが苦手。

その他: まつもとのおばちゃま(米沢生協の主  
髭ぼうず(米沢市役所職員I氏)  
松永のおさん(島原ボランティア協議  
会前事務局長: そうめん屋の社長)

げることになった。別れの際に丸山が声を  
掛けた。「はじめちゃん、やっちゃん、何かあ  
ったらすぐそっちに行くからね。」ちなみにこ  
れまで災害の復旧は、国や自治体が中心と  
なっていたが、神戸では初めて民間  
の有志の支援で行われたことから、後に「ボ  
ランティア元年」とも呼ばれた。

◆4本目の矢◆

2004年、井上たちが経営にあたる米沢  
生協が、新たに米沢市花沢町にグループホ  
ーム「結いのき」を開設した。さらに2年後  
井上は、日本福祉大学に進み医療・福祉  
マネジメントを学ぶ。高齢化社会は避け  
られないし、ボランティアと介護福祉は酷  
似している。災害ボランティアで学んだ経験  
を社会福祉事業に活かしたいと思った。  
井上はそこで綾部と出会う。綾部は井  
上が学ぶ医療・福祉マネジメント学科の  
講師だった。三菱自動車に勤務。後に青  
年海外協力隊として南米ボリビアに行  
ったのが縁で、同国の国立大学の客員教授も  
勤めていた。親子ほど歳が離れた師弟関  
係であったが妙に馬が合った。綾部は真摯  
で謙虚で、情熱的なおさんの学生が気に入  
った。今は自分が師であるが、いつかは井上  
のような人間の元で実践の福祉の現場を  
研究したいと思った。  
2年後その思いは現実となる。綾部が  
山形大学の大学院理工学研究科の准教  
授として赴任してきたのだ。綾部はすぐに井  
上の元に駆け付け、「また会えたね、はじめ  
ちゃん」と手を差し出した。誰が綾部をスカ  
ウトしてきたか分からない。しかし他の山形大  
学工学部の教授陣の顔ぶれを見ても、こ  
の大学の人材発掘力は、超一流と言っても  
決して過言ではないだろう。

「ボランティア山形」～新しい時代の市民の力～

(注)必ず中島みゆき「地上の星」を聴きながら読んでください!

東日本大震災後、被災地では情報が錯綜、  
行政の機能が低下し支援物資が行き届かず  
混乱を窮めていた。その結果被災した住民が  
大挙して隣県に押し寄せた。そんな中米沢  
市は福島から約3800人の避難者を受け入れる  
こととなった。その運営を担ったのが米沢市民  
と全国から駆けつけた災害ボランティアたち。  
彼らの山形県という立地を生かした迅速な活  
動や被災地への心のこもった支援は、被災者  
のココロをあたため、そして抱んだ。これは今後の  
災害ボランティアのあり方を示す貴重な団体の  
物語なのである。

◆フロッグ～誕生～◆

今から17年前の末明、阪神地方を阪神淡  
路大震災が襲った。地震発生から約3時間  
後の午前9時に1通のFAXが井上の元に届  
いた。神戸への緊急支援ですぐに助けに来て欲  
しいという要請だった。そのFAXは当時の米沢  
生協(現生活クラブやまがた生活協同組合)  
の組合員や理事会を動かした。山形県民に  
ボランティアを呼びかけようという意見が渦  
のように湧き上がり、「ボランティア山形」が誕  
生する。井上の高校時代からの知友、新聞も  
加わり彼らはすぐに行動に移る。あっという間  
に県内から90名を超す被災地支援の希望  
者が集まり、63名のメンバーが現地へ向かった  
彼らはその後何回も出かけることになったが、もち

ろん活動資金はゼロ、すべて自己負担での参  
加である。彼らは多くの被災者の瓦礫の撤去  
引越し作業、障がい者の方々の入浴のお手伝  
いなど幅広いニーズに応えるべき。汗をかき一  
懸命に働いてくれた。井上と新聞の縁から  
は、この時の被災した神戸の光景が今も離れ  
ない。

◆使徒たちの出会い◆

17年前の神戸、丸山は自ら被災しながら  
も瓦礫の中、不眠不休でボランティアとして働  
いていた。避難所で疲れ果てていた丸山は、  
聞き慣れないズースー弁を耳にした。「あまり  
無理しねえで、ちょっと休んだらいいよ」米沢  
からやって来た新聞たちが、見るに見かねて労  
いの声を掛けたのだ。彼らはすぐにうち分け  
「神戸の復興から日本の再出発を学ぼう」を  
合言葉に力を合わせ、ボランティアに取り組ん  
だ。その中には精力的に動き回る九州弁の  
おさんがいた。雲仙・普賢岳噴火で被災  
経験のある島原ボランティア協議会の松永  
であった。彼のアドバイスや指揮は常に的確  
であった。悪魔の咆哮のような火砕流の災害  
から復興を果たしたリーダーの一人であった。  
彼から学ぶことは多かった。

そして数ヶ月が経ち、一定の目途が付い  
たとところで、井上たちは完全に神戸を引き

◆運命の日◆

その彼らに転機が訪れた3.11。井上は  
東京に向かう新幹線に乗り、5分も経たな  
い内に地震に遭った。わずか10キロほどの距  
離だが、新幹線を脱出して米沢に戻るまで  
17時間かかった。丸山は都内の九段下で被災、  
帰宅難民となっていた。後に救援物資の輸送  
で獅子奮迅の働きをする新聞は、自宅で毒  
の腕の中で震えていた。綾部はものづくり技術経  
営学(MOT)専攻という大学院の試験の最中  
であった。度重なる余震の中、震える足で最後まで  
試験を行った。井上は米沢駅からいつも常  
駐している「結いのき」に戻ると、もう既にボラ  
ンティアグループの松本、皆川のおばちゃま  
たちが炊き出しを始めていた。夜も更けた11  
時過ぎ、彼らの前線基地に一本の電話が鳴  
り、最初の仕事が飛び込んできた。米沢市が  
災害時相互応援協定を結んでいる都市へ支  
援物資を運んで欲しいというものだった。井上  
は新聞を隊長としたメンバーと生協職員を  
翌朝午前5時に召集した。彼らは支援物資を  
満載したトラックで被災地に向かった。16年ぶ  
りの「ボランティア山形」の活動再開の日であ  
った。

地震の翌日早朝。  
米沢市消防署から  
生活クラブやまがた  
のスタッフが被災地へ  
と出発する準備を  
すすめた。



## ◆東奔西走◆

今回の震災では、米沢は奇跡的に停電もなくライフラインも正常であった。地震直後からガソリンや食料、水を求めて近隣から大勢の人々が集まった。その中には予期せぬ来訪者も多かった。多くは福島県からの放射能被爆を恐れた自主避難者の方である。米沢市では急遽市営体育館を解放したが、ここは元々指定避難所ではなく、米沢市のスタンスは、寝泊まりには使えていいが、食事は自分たちで手配して欲しいというものであった。しかし着の身着のまま次々と避難してくる人々が後を絶たない。そこで米沢市では急遽方針を変更、食料の配布を決めた。日に日に避難者は増え地震から5日後、585人までになった米沢市も避難者の多さは想定外であった。綾部と井上の師弟コンビもすべて行政任せではいけないと思った。2人は民間が主体となり、行政を支えるという体制つくりのため、米沢市内を駆け回った。そして井上は16年前のあの一言を頼りに、ある2人に連絡を取るためダイヤルを回した。



3月13日に避難者は100人を超え、この後日に日に増えていった。

## ◆約束の地での再会◆

米沢からの電話を受けた丸山は、懐かしい声を聞いた。「原発事故で多くの福島県民が、米沢市を避難先としてどんどん入ってきているんだ。受け入れ体制はあるのだが、避難所運営とマネジメントできる人がいない。丸ちゃん手伝ってくれないか？」余震の危険もあって恐ろしいのはやはり放射能だ。恐くないといえば嘘になる。でも他ならぬ井上の頼みだ。丸山は目を閉じた。16年前の神戸、そこには人が人を助けるのが当たり前な社会があった。地震は怖かったけど、人が優しくかった。

この電話は、あの時生き残った自分の使命を再確認するためのものだ。口からは無意識に「手伝わせてください」という言葉が出ていた。そして丸山は翌日、新潟から小国まで電車を使い、最後はヒッチハイクで米沢の井上の元に辿り着いた。時刻は3月16日の夜8時過ぎ、出発から10時間が経っていた。松永のおさんもまもなく来てくれるという。丸山は思わずほっとしたが、これから神戸の時と比べものにならない長期の生活が始まるのかもしれないと漠然と思った。

## ◆謙信公の遺志を継ぐ人々◆

井上の元に災害ボランティアの両ベテランが揃った。先着した丸山は、翌17日早朝から体育館に常駐した。井上は米沢市に物資やボランティアは多いものの無秩序状態だった避難所の体育館を丸山をリーダーとして仕切らせて欲しいと頼んだ。市としても願ってほしいことで、すぐに連携体制が組まれた。丸山は言った「体育館の

運営は出来る限り、避難者が取組みまないと本当の意味で問題解決にはならない。」そして先ず体育館の整理整頓を指示し避難者をグループに分け、班長を募った。丸山の考えに同意した何人かが手を挙げた。彼らは良く話し合った。それが避難所のコミュニティ形成に活かされ、避難者や市民ボランティア、市職員とのコミュニケーション、信頼関係の構築にも結びついた。

商工会議所や青年会議所、観光物産協会、各種宗教法人、そして市職員OBもいち早く動いた。さらに米沢市民も立ち上がった。丸山と松永は口を揃えて信じられないとつぶやいた。「こんな小さなまちで、短期間にこれだけの人が集まるとは…」市民ボランティアは、一週間も経たないうちに850人の登録があったのだ。加えて神戸から被災地NGO協同センターや都市生活コミュニティセンターなどの災害ボランティアが集結。この力が一体となったおかげで避難者に対して温かい炊き出しや、足湯、さらにお風呂の提供やマッサージのサービスもなされた。おにぎりには1個ずつに「米沢ようこそ、お体にお気をつけてください」というメッセージが入ったシールが貼ってあった。避難者の方々が口々に言った。「感動し涙が出た、このことは一生忘れない」そしてそのシールを今も大事に財布に入れておられる方が大勢いる。



おにぎり1つ1つにこのカードがついていた。米沢市民の温かさが、避難者の心も温めた。

## ◆秘された力◆

後に丸山が言った言葉。「今回の避難所の運営がスムーズにいったのは、米沢の善意の市民力と米沢市役所の職員やOBの献身的な活動のおかげだった。」井上も同調した。「市職員の方々は、避難者に対してもボランティアに対しても、常に笑顔で接していたのが成功の鍵となった。」いつの間にか、丸山の下に「髭ぼうず」と呼ばれる市職員のIが弟子のようにくっついてきた。彼は市から体育館に派遣されていたが、休みの日も体育館に詰めこいた。常に笑顔を絶やさず文字通り献身的なサポートを続けていた。他にも休日ボランティアで協力してくれた市職員は大勢いたのだ。今まで秘された力が発揮された瞬間でもあった。

綾部は今回のような非常事態でも、スムーズに行政機能が働いたのは、井上のようなプロデューサー、丸山のようなマネージャー兼コーディネーターの存在と、新聞のような実働部隊の活躍、そしてなにより米沢市の職員たちのコミュニケーション能力が豊だったからと分析した。井上も持論の「行政がボランティアを支援する」のではなく、「行政を支えるボランティア活動」が正しい概念であることを確信した。

## ◆人を動かすもの◆

震災から約2ヶ月経ち、被災者が2次避難や山形県や米沢市の雇用促進住宅に移動し、新しい環境に進み始め市営体育館が空になった。その体育館壇上に避難者からのメッセージが残されていた。切り取った

大きなダンボール1枚1枚に一文字ずつ、「米沢の皆様へ感謝 福島は負けない!」と書かれてあった。ボランティア山形のメンバーや市の職員らは、目頭が熱くなり、脚の中に小さな感動の渦が湧くを感じた。同時に、第1のフェーズ(段階)が終了したことを知った。

第2のフェーズは、第1フェーズと同時進行していた被災地への支援物資の供給だ。全国の支援者から食料や雑貨が、この物資供給の中継局となった米沢に毎日のように届いた。しかし物資供給はあらゆる自治体、ボランティアで行われていたが、中々隅々まで行き渡らなかった。放射線量の多い地域や、その中でも特に自宅被害者に物資が届かなかった。井上はこのままでは被災者を見殺しにしてしまうと危ぶんだ。若い丸山と綾部は思わず目を落とした。井上と新聞は言った。「それは俺の仕事だろう」彼は宅配業者も避けて近寄らなかった地域に、放射線量も気にすることなく自らハンドルを握り、毎日のように物資を運び続けた。助手席には日替わりで他の3人が座っていた。丸山と綾部の頬はこけ、井上と新聞は白髪が倍増していた。

## ◆エピソード ～夜明けそして再出発～◆

12月31日にボランティア山形のメンバーは、体育館で苦楽を共にした米沢の市民ボランティアと、米沢市の姉妹観光都市である石巻市の松蔵寺(しょうざんじ)にいた。副住職の依頼で檀家さんにご近所の方々へ寺煮と玉こんに、そして年越し蕎麦の振舞いをするに決めたのだ。また天童市の鐘メーカー「渡辺梵鐘」(ぼんしょう)の提供で、境内に除夜の鐘をセットできた。被災者がこの鐘を打つことで、心の区切りを少しでも付けて欲しいとの企画だった。

ボランティア山形のメンバー、彼らに待ち受けている第3のフェーズは、これから東北全体の復興に際し、瓦礫の撤去、被災者の心のケア、住宅の建設など課題は多い。特に隣県である山形は、福島原発事故で家に居られない人たちの住居や職場としての機能を果たさなければならぬと考えていた。特に大事なのは被災者の方々の「仕事」づくりである。現在米沢には、約4千人弱の避難者が暮らしている。彼らは時限付き山形県民であるが、できれば永住して欲しい。それには自分たちの力だけでは足りない。

井上は3人に言った。「私たち4本の矢は決して折れることはない。しかし東北の再生復興プロジェクトのためには、人材の育成が急務だ。まだまだ気の遠くなるような矢を束ねなければならぬ。今日が新しい日本、そして我々の夜明けだ。」4人は自分たちが出会った意味と使命を胸に鐘を突いていた。鐘の音だけがいつまでも耳に残っていた……

注)一部フィクションが織り込まれているかもしれませんが、悪しからず……

鯉太郎の独り言

このボランティア山形のメンバーの活動には、敬服の外はありません。いつもこのコーナーはおちめらけが入るのですが、今回は書けませんでした。後方支援という名目で彼らとお酒を飲むこともあるのですが、市職員のI君が加わると6人で5本の一升瓶が空くかもしれません。(恐)ちなみに井上さんは、いつも一滴も飲まずに最後まで付き合ってくれます。

# 山形おきたま伝統野菜 Part II

## 「小野川豆もやし」

■ ■ 山形おきたま伝統野菜とは... ■ ■



置賜(おきたま)地方は、9代藩主上杉鷹山公による奨励策などを通じ、様々な特色ある野菜の栽培がこの時代に始められたと伝えられています。また置賜地方には、このような歴史にまつわる伝統野菜や身近な山々から採取される山菜を食材とした独特の食文化が今も息づいています。山形おきたま伝統野菜推進委員会は、置賜地域の伝統野菜等の生産振興とともに食文化の継承や観光等の振興を図ることを目的に、市町の推薦を受け、認定基準に適合した伝統野菜、特産林産物等を「山形おきたま伝統野菜」に認定しています。「山形おきたま伝統野菜」というネーミングは、「置賜の歴史と食文化を伝える」をコンセプトに、認定野菜の総称として決定しました。

認定品目: おかひき、雪菜、うこぎ、薄皮むね、小野川豆もやし、花作大根、わらび、せんまい、あざみ、紅大豆、高豆くうり、の計11品目

### ◆ 特徴 ◆

普通のもやしとちがい、胚軸が約20センチ程に成長します。栽培は11月から3月までの冬期間だけ、温泉のお湯を利用して作られます。毎年11月になると温泉街の近くに作業場が建てられ、中に「室」と呼ばれる木製の箱を並べ、その下に温泉を通して天然の温室のような状態にします。室の底に15センチほどに砂を敷き、1晩水に浸しておいた「もやし豆」をまきます。この上に豆が見えなくなるまで砂をかけ、ムシロやワラを編んだコモでおおって室の中を常時30℃に保ちます。この状態で1週間、大切に育てられた豆もやしは収穫されます。シャキシャキとした歯ざわりが特徴で、米沢の冬の食材として、かかせないものになっています。

### ◆ 歴史 ◆

明治の初め頃から栽培されてきたといわれていますが、はっきりしたことは分かっていません。ただしこの「もやし豆」は、新潟県の在来系統「刈羽滝谷」と最も関係が深いことが山形大学農学部での調査で分かりました。このことから、上杉藩のつながりで新潟県から米沢市に持ち込まれたのではないかと考えられています。

### ◆ 栄養価 ◆

ビタミンB1、B2、ビタミンC、食物繊維

### ◆ 栽培データ ◆

産地: 米沢市小野川地区  
栽培面積: 約1ha(おし豆作付面積)  
生産量: 約6t  
収穫時期: 11月下旬～3月下旬

〈お問い合わせ先〉  
山形県置賜総合支庁産業経済部 農業振興課  
〒992-0012 米沢市金池七丁目1-50  
Tel. 0238-26-6051

### 小野川豆もやしと エビの炒めもの

- 材料(4人分) ■酒大さじ3  
・小野川もやし300g ・熱湯適量  
・干しエビ大さじ4 ・塩小さじ1/2  
・しょうが(みじん切り)1かけ ・こしょう少々  
・サラダ油大さじ3 ・ごま油大さじ1/2

- ① 小野川豆もよしのひげを取り、5センチに切る。
- ② 干しエビは、かぶるくらいのぬるま湯に浸し、10～15分おいて戻す。戻し汁は取っておく。
- ③ 中華鍋にサラダ油を熱し、干しエビとしょうがのみじん切りを中火で炒める。香りが出たら強火にして豆もやしを加え、サッと炒める。
- ④ 酒、②のもどし汁と熱湯を合わせてカップ1/3を加え、塩、こしょう、ごま油を加えて早く仕上げる。

## タスクワーズNEO おたっふ紹介

販売・発送梱包の美女チーム?の  
「ええねん!」

疾風のおかづ(鈴木かづ子)  
S: 乙女ご舞い  
団体バス、完売  
K: 閉古鳥、ひま  
「行列がええねん」

怒濤のおはる(安部洋)  
S: おいぬいかやかや  
10時のお茶、3時のお茶  
K: 沈黙の世界  
「うるさくてええねん」

タッシー(田代宏美)  
S: 従順なしもべ  
おたっふの  
オロジニア  
K: 禁煙ゲームおはる  
「ステディーがええねん」

サッチ(渡部幸子)  
「旦那が欲しいわん」  
S: おいぬ、米沢餅、ともあ、地吹雪  
K: 欠品、返品、不良品。

セセ(佐藤くに子)  
「お花が咲けばええねん」  
S: 池坊、剣山、おはる、花  
K: 立ち枯れ、  
假屋崎省吾

せめやかリッ子さん  
(江口律子)  
S: おいぬ、マジック  
K: ゆっくり、じとじと  
こと

うっかり直兵衛  
(三條直子)  
S: おいぬお話し相手、バグン  
K: 口数の少ない人、お経、お経  
「にぎやかかがええねん」

わたしたちは  
ひまわりのように  
明るい笑顔の接客を  
心がけています

いつも私たち7人が、本店やテナント、催事での販売を担当しております。また、通販の  
詰合せ出荷も行っております。お荷物の中に出荷担当者のハンコが入りますので、  
顔写真と照らし合わせてみてください。宜しくお願い致します!m(\_)\_m



## いつか被災者になるかもしれない でもそこには人が人を助けるのが 当たり前の社会がある

ボランティア山形、綾部 誠、井上 肇、  
新関 寧、丸山弘志 共著  
〈内容紹介〉

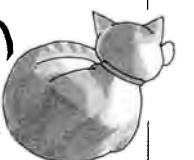
東日本大震災後、山形県米沢市では、福島から3800人を越える避難者を受け入れ、また、宮城、岩手の被災地にも、物資やボランティアを送り続けた。米沢市民や全国から集まったボランティア達をどう組織すれば良いのか? 官や企業とどう協働していけば良いのか? 実際に運営に携わった「ボランティア山形」のメンバー4人による、これまであまり注目されることのなかった「ボランティア・マネージメント」のあり方について考える、新しい時代へ向けた災害ボランティア論。



鬼嫁のつゆき  
いつか被災した時、  
また被災された方を  
助ける時が来るかも  
しれない。そんな時の  
ための必読書です。  
弊社誌上でも

1冊1470円(税込)で販売致しますので、  
どうかご購入いただけましたら幸いです。  
売上はボランティア山形さんに於いて全額  
被災者支援、震災復興のために使用され  
るそうです。

うちのM=おぎ  
最近おぎは胃炎にかかってしまいました。  
おんておね、おんにもストレス。  
耳をママが毎日帰りが遅くて寂しかった  
のかな... おんね、おぎ



鯉屋のこよみ	3月17日(土)～21日(水)
2月8日(水)～3月31日(土) 2012年 寒鯉セール	3月31日(土)～4月2日(月) 山形県観光物産会館 催事出店販売
2月11日(土)・12日(日) 第35回 上杉雪灯籠まつり 開催	4月29日(日)～5月3日(木) 上杉まつり 開催
3月6日(火)～9日(金) 国際食品・飲料展 FOODEX JAPAN 2012 in 幕張メッセに出展	5月1日(火)～3日(木) 鯉の宮坂 恋まつり 5月1日(火) 米沢商組合 鯉供養祭 5月8日(火) 鯉の宮坂 鯉供養祭